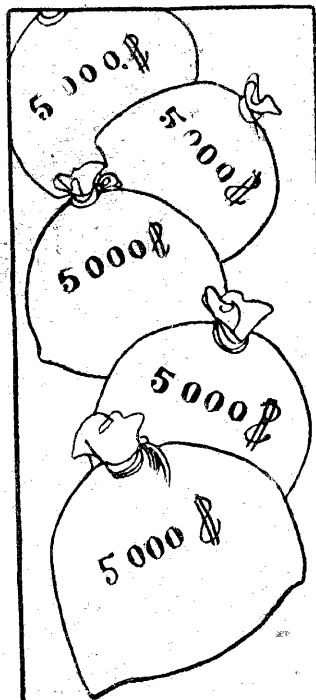




滑稽小説 博愛數學講座

オ・ヘンリー

「教育の爲に、五千萬弗以上も寄附した奴が有るとよ。」さう私は言つた。
私は夕刊の拾ひ読みをし、ベイターはブライアーのパイプへ煙草を詰めて居た。
「もう一勝負つて言ふんで、餓鬼を集めて博愛數學の暗誦をさせると同じやうなものだね。」とデエフは言ふ。
「何か其んな事が有るのかネ？」と私はきいた。
「有るとも。俺とアンデイ・タツカが博愛家に爲つた頃の事は、未だ話さなかつたかネ？ 八年前にアリゾナでの事だ。アンデイと俺は

二頭立の四輪車に乗つて、ギラ山脈の銀鑛を探しに出かけたんだ。さうして、うまく探し當てたので、其れをタクソンの奴等に二萬五千弗で賣飛ばしたよ。銀行では銀貨で拂つてくれた——千弗入りの袋でネ。俺達は其れを四輪車へ積みこんで、夢中で百哩もブツ飛ばした。ペンシルバニア鐵道の營業報告を讀んでる時だの、役者が自分の給金の事を話すのを聞いてる時にや、二萬五千弗位は大金とも思へないが、四輪車の床が高くなつた所へ靴の踵があたつてガチャ／＼音がするのを聞いてる時は、時計が十二時を打つた時の晝夜銀行にでもなつたやうな氣がするもんだよ。

「三日目に俺達は罌粟粒ほどの小つほけな町へ乗り込んだ。小山の麓にあつて、木と花で客な御化粧をし、正直で傾間な連中が二千人ばかり住んで居る町だ。花園村とでも言つたはうが似合ふやうな町で、未だ何本もの鐵道だの、蛋だの、東方旅行家なんかに穢されて居なかつた。

前がたは其れを硝子壺の水の中へ入れてくれつて云ふだらう。馬鹿者が！」つて乙は言ふんだ。
「其れは兎に角、俺達は前に言つたやうな金を持つたので、博愛心が起きて來たものだ。俺とアンデイが何うして其れを儲けたらうかなんて考へる位の大儲けをしたのは其れが初めてだつたのだ。
「俺は言つた、アンデイ、俺達は金持だ。素敵滅法界と言ふほどでは無いが、俺達の身分にして見りや成金だあネ。で俺は人道の爲に何かしてやりていやうな氣がするんだ」

「俺とアンデイは、俺達の金と、ベイター・タツカア合名會社の名義でエスベランザ貯蓄銀行へ預け、望空旅館と言ふのへ泊つた。夕飯のあとで俺達が張出で一服やつて居る時に、ひよつこり俺に博愛の考へが起つた。惡黨つて者には、誰れでも一度は其んな事が有るのだらうよ。

「俺と同じ事を考へて居たよ、デエフ」つて奴も言ふんだ。「自然發火のセルロイドのカラアを賣る事から初まつて、ホーク・スミスの大統領選舉記念ボタンでデョオヂア中をアツブ／＼させるまで、俺達は随分いろんな小さいくらゐで永い間世間の奴等を騙くらした。俺として見りや、救世軍のシムバリンを引ばたいたり、バアテロン式のバイブル・クラスを教へたりしないですむ事なら、何方へ轉んでも間違の無い賭をしたいよ」

「つまり世間の奴等から善い加減捲き上げると、少々怖くなつて來て少し返してやらうと思ふんだネ。其うして何んな具合に其の慈善をやるかつて言ふに、其れをふんだくつた連中へ返さうとするものだよ。一例を査定して見ればだネ、甲なら甲つて奴が石油を賣つて數百萬儲ける。其の御得意と言ふのは經濟學を研究しトラストをやつつける仕組を研究して居る貧乏書生だによつて、罪滅ほしの喜捨は大學や専門學校にやると言ふ譯になるんだ。

「何うしやうか？」つてアンデイは言ふんだ。「貧乏人にとつて飯を食はしてやらうか、それとも何千人もの餓鬼をデョオヂ・コオテルユーで遊ばしてやらうか？」
「何方もいけねい」つて俺は言つた。「俺達はあたり前の慈善をやるに金は有り過ぎるし、元の持主に辨償してやるほどは無しさ、それで其の中途の事を探さんだネ」

「其の翌日俺達が花園村を歩いて見ると、空屋らしい赤煉瓦の建物が小山の上に有るんだ。土地の者に聞いたら、何年前かに或る鑛山師が自分の住居に建てたんだが、建て、しまつて見ると拂ふ金が二弗八十仙しか無かつたので、其れをウイスキーに投資し、屋根から飛下り粉微塵になつて御陀佛したと言ふんだ。

「この建物を見ると俺とアンデイは同じ時に同じ事を思ひついた。俺達は其れに電燈とベンチと講師を設備し、庭には鑄物の犬とハアキユルとフアザア・デヨンの銅像を据ゑつけ、世界一の無料教育機關を起さうと言ふのだ。」

「それで俺達は其の事を花園村の有力な連中に話したら、大喜びで、俺達の爲に發電所で宴會を開いてくれて、生れて初めて俺達は進歩と開化の爲の恩人として御辭儀をしたよ。アンデイは「下部埃及の灌漑に就いて」と言ふ題目で一時間半の演説をや、蓄音器にも、鳳梨の汁にも道德的氣分と言ふやつが匂つたわけだ。」

「アンデイと俺は早速博愛にとりかゝつた。路臺の上で槌を使へる町の者は一人残らず仕事にかゝらせて、其の建物を教室と講堂に區ざりをした。桑港へ電報を打つて、机、蹴球計數器、ベンチ、辭書、教授用椅子、石板、骸骨、海綿、上級生用のクレバネットのガウンを二十七着、その外第一



流の大
學で使
ふゴタ

ゴタした物をみんな送られて注文した。そして俺が自分で其れに野營天幕と課程表をつけたのだが、電信技師が間違つたに違ひない、品物が着いて見たら、豆の罐詰と馬櫛が一ツづつはいつて居た。

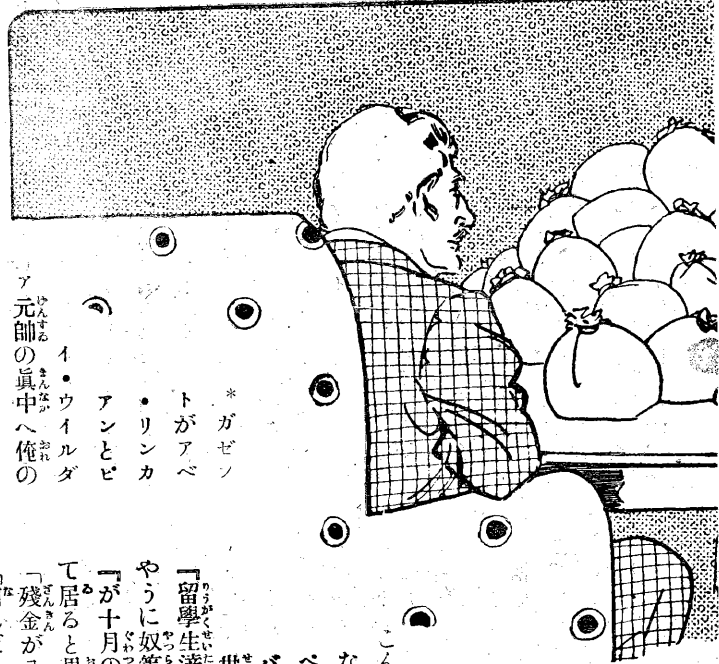
「週刊新聞は俺とアンデイの白墨畫の肖像をのせた。俺達はシカゴの口入宿へ甲板渡しで教授を六人至急送られて電報を打つた。一人は英文學、一人は最新流行の死語、一人は化學、一人は經濟學（成るべく民主黨の、一人は論理學、一人は繪と伊太利語と音樂とトラムズの器用な奴を、給料は最低八百弗から八千五十仙まで、其れはエスベランザ銀行が保證をしてくれた。」

「さて君よ、俺達はたうとう物にした。入口の戸の上には「世界大學寄附者兼持主ベイヤア並にタツカア」と彫り附けてネ。曆が九月一日の所へ來ると、おはいんなさいがドヤ／＼と押込んで來たネ。先づ教員達がタクソンからの急行列車でやつて來た。大概若くて、髪が毛が緒く、大望と食物にかつてゐる奴等だつた。アンデイと俺は其奴等を花園村の住民の家へ宿割りをしてやつて、それから學生に提供した。

「奴等は束になつてやつて來た。俺達は大學の事を州中の新聞に廣告したんだが、すぐに手ごたへがあつた。若いのは十八から、顎髯を生やしたのまで二百十九人、聲變りをした俄鬼が無料教育つて言ふ喇叭で集まつて來た。奴等は其の町を洗ひ張りしたやうにしてしまつた。

「奴等は世界大學の旗——群青色と緑色の——を振つて町を練りまはし、たしかに花園村を生々した所にした。アンデイは望空旅館の露臺から奴等に演説をし、町中が御祝で引つくり返る騒ぎだ。

「一週間ばかりして教授達は學生を解散して學級に編入した。博愛家になる位の樂しみと言ふものは外には無いネ。俺とアンデイは高い絹帽を買つて、そして花園村ガゼットの二人の記者の追跡から遁け廻るふりをしたよ。其の新聞では俺達が行きへ出るたびに寫眞をとらせて、毎週教育欄と言ふ所のせた。アンデイは一週に二度大學で講義をした。そのあとで俺は面白い御話を聞かせた。」



ガゼン
トがアベ
・リンカ
アンとビ
イ・ウイ
元帥の眞中へ俺の

「あゝ寢衣のことか」つて言ひやがる。「其うちや無い。くしや／＼だよ」つて言つても、アンデイの奴、たうとう判らないから註文をしなかつた。學生達が行列になつて寝る長い病院みたいな所の事なんだがネ。

「さて君よ、世界大學は成功だ。五ツの州と植民地から留學生がやつて來て、花園村は大量氣だ。新らしく射的場と質屋が出来る。酒屋が二軒ふえる。生徒達はこんな校歌を作つた。

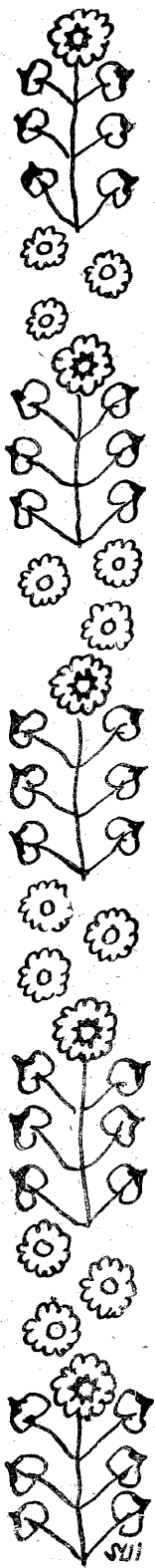
ベイヤアス、タツカア滑稽がいろ／＼
パウ、ワウ、ワウ、ハウ、ヒイ、ハウ
世界大學ヒツブ、ハラア

「留學生達は善い若者ばかりだつた。俺とアンデイは自分の家族のやうに奴等を自慢した。『が十月の末の或る日、アンデイがやつて來て金がいくら銀行に残つて居ると思ふかと言ふんだ。俺は一萬六千位だらうと思つたら、『殘金が八百二十一弗六十二仙だ』つてアンデイが言ふんだ。『何んだつて！』俺は怒鳴つた。『あの地獄の骨無し、ぐにや／＼のいぬころ面の、阿呆の、搔ッ浚ひの、兎の耳をした、馬泥棒の倅達が其んなに澤山俺達につかはせたと云ふのか？』

「如何にも其の通り」つてアンデイの奴吐しやがる。「其んなら博愛なんかやめつちまい」つて俺が言つたら「其れには及ばない」つてアンデイが言ふんだ。博愛だつて、ちやんと算盤を取れば結構儲かる商賣だよ。『次の週に教員の支給表を見ると新しい名前がある——教授チエム

「ス・ダレイ・マコオクル、數學講座、俸給一週間百弗とあるんだ。俺はアンデイが慌て、通け出すほど大聲で怒鳴った。
「これは何んだ。一年五千弗から出して數學の教授になんて、一體何うして此んな事が出来たのだ？」
「俺が一週間前に桑港へ電報を打つて呼んだのだ。俺達は教員を註文するに數學講座の事を忘れたからネ」つてアンデイが言ふんだ。
「結構な話だ、二週間は給料を拂へるが、それから俺達の博愛もシクボのゴルフ場の九番ホールみたいに出来るだらうよ」
「まあ、もう少し何うなるか見てろよ。今手をひくにしては、一體仕事があり高尙過ぎるからな。其れだけで無く、俺には此の博愛小賣業が見れば見るほど善く見えるんだ。以前には此んなものに金を注ぎ込まうなんて氣は無かつたが、今は其の思ふよ」つてアンデイは言ふんだ。俺は知つて博愛家つて奴は皆んな大金持だ。俺は大分前から其の事を考へて、何れが原因で、何れが結果だかを知らなければいけなかつたんだ。
「俺は金儲けの凄腕ではアンデイを信用して居るから、まかせつきりにして置いた。大學は盛んに繁昌し、俺とアンデイは依然絹帽を光らし花園村は依然俺達を百萬長者のやうに尊敬して居た。
「學生達のおかげで町は依然賑やかで繁昌した。何處かの奴が來て、馬車屋の廠の二階で賭博場を開いて、しこたま金を運び込み出した。俺とアンデイも或る晩ブラリと上り込んで御附合に一二弗賭けたが、其處には俺達の學生が五十人ばかりも居て、ラム酒のボンスを飲みながら、賭博師が骨牌をめくるにつれ、テーブルの上へ青と赤の札束を山のやうに投げ出して居た。
「何うだい、アンデイ、此奴等、無月謝學校荒らしの、間抜けの、絹靴下をはいた、啄木鳥の小倅共は、御前と俺が持つて居たよりは餘計

の金を持つて居るぞ。あの尻のポケットから引張り出す束を見たか？」つて俺が言つたら
「ウム、大抵は金持の礦山師か、株持の息子なのだ。此んな風にのくらして居るのは實に悲しむべきだ」とアンデイは言つた。
「クリスマスには學生全部休暇で家へ歸つた。俺達は大學で告別式をやつて、アンデイは「群島における近代音楽と有前文學」に就て講演をし、教員達は一人々々祝盆に答へて、俺とアンデイをロツクフェアラとマルクス・アウトリカスに例へた。俺はティブルの上へ飛び上つてマコオクル教授の萬歳を言つたが、其の時、其の男は居合はせなかつたやうだ。俺はアンデイが一週間百弗も呉れてやつて善いと考へた其の男が見たかつた。
「學生は皆んな夜汽車で立つて行つたので、町は夜中の通信學校のやうに静かになつた。俺がホテルへ行つたら、アンデイの室で灯が見えたので、戸をあけて入つて行つた。
「中にはアンデイと賭博師が居て、ティブルの上へ一千弗入の袋で金を二呎ばかり高く積んであるのを分けて居た。
「たしかに、めい、三萬一千、おはいり、デエフ」つてアンデイが言ふんだ。此れが合資博愛會社世界大學の前半學期の儲けのうち俺達の分だ。博愛も商賣式にやれば、其れを與へる者にも、受ける者にも祝福がある技術だつて事が此れで判つたらう。
「素敵だ！ 今度こそは御前がドクトルだつて事を承認するよ」
「俺達は朝の汽車でたとう。カラアとカフスと新聞の切抜をまとめて置いた方が善いよ」つてアンデイが言ふんだ。
「素敵だ！ 用意して置かう」と俺は言つた。だがアンデイ、立つ前にデエム・ダンレイ・マコオクル教授に遇ひたいネ。俺は其の男を一度見て置きたいんだ」
「難作も無い事だ」とアンデイは言つて、其の賭博師の方を振り向き「デム、ベイター君と握手をしる」つて言つたよ」



禁酒運動の科學的基礎

—特に工業能率増進に就て—

日本禁酒同盟會長 伊藤 隆

節約宣傳の流行

近來、政府當局は系統的に全國に通じて節約の宣傳を行つて居る。これはもつとも結構なことであつて、今日の如く一方に於ては人口益々増加するにもかゝらず、他方に於ては米の作付段別が漸次減少し、それがために年々四百萬石の米が減少しつゝあるといふ我國の現状を顧みたるならば、節約宣傳は當然過ぎる程當然なことである。

然し乍ら吾々は、これ等の狀態を仔細に觀察する時に、そこに或る大なる矛盾と、不滿とを見出さざるを得ない。節約宣傳は無倫いゝ然

禁酒運動の科學的基礎 (伊藤)

輸入超過の激増

し不足の四百萬石の米が國民に害毒を流しつゝある酒と化しつゝあることに氣づかないのはどうした事か。節約宣傳といふ姑息な手段に出るよりも、何故に禁酒令を發して、これ等の弊害と浪費とを、根本的に剪除の勇斷に出でないのか。
當局者が誠意と勇斷とを披瀝して、節約宣傳の代りに禁酒令を發布したならば、そこには多少の弊害があるにしても、莫大な浪費を喰ひ止めることが出来る。少くともそれによつて現在力説されてゐる節約宣傳の効果の十数倍の效果をもたらしことが出来ると信ずる。
然し、私が禁酒論者として、積極的に禁酒の必要を力説する所以は、之によつて、國家の活動力を旺盛ならしめ、國富の増進を圖るといふ點に存するのである。今や我國は最大の國難に遭遇してゐる。この難局を打開し、國難を救済する根本的の方策は、この禁酒の一事に存することを信じて疑はないものである。
我國は大正八九年以來今日に至る迄、輸入超過を續け、向後もますます増加の勢を示してゐる。歐洲大戰當時に於ては、各々交戰國は凡て生産機關が破壊され、又破壊されない迄も、